顔面島

中編

清水鱗造

灰皿町

マネキントカゲには驚いたが、植物園はこぢんまりしていて自然の状態の植物をうまく配置した広い庭園の形で二人ともかなり気に入った。いくつかの出口があるので、地図を見ながら入口とは反対方向から出た。植物園の塀に沿った道を歩くと、まだ植物園の中なのかと錯覚するほど目新しい植物がある。なにか気難しい顔が描かれたような丸い果実が成っている木が、道の脇に二本続いていた。

「あの実は初めてみるね。顔の模様は少し気難しくてユーモアを感じるけど」と多肉ちゃんが言うので、蕪留さんが旅行案内の樹木の項目に「ダルマの木」の写真があったので見せた。「これこれ、食べられるんだ。顔の絵柄なので剥くときに困るね」と蕪留さんは言った。確かによく見るとダルマの顔で、数個の実がまとまってたわわに成っている。

植物園に沿った道から少し広い道路に出ると、小さな商店街だった。だいぶ歩いて汗をかいたので、喫茶店に入った。

「オヤジさんのご希望の民芸品ふうな額縁が売っていたら、買っておきましょうか。夜市が始まる前に、ほかにも少しお土産の買い物もしましょう」と多肉ちゃんが言うので「この商店街をひととおり歩いてみるとおもしろそうだよね」と蕪留さんも賛成した。少し遅い昼食を食べたが、コーヒーに添えられた砂糖の形がまたダルマの顔だった。二人ともう驚きもせずに、ダルマの木の実を模した気難しい顔の図柄の丸く硬い砂糖を

スプーンで転がして観賞した後、熱いコーヒーに入れるとすぐに顔の輪郭は溶けていった。

喫茶店は細長く奥に続いていて、中庭があった。建物にある中庭にメソカシアの雰囲気を感じる。たとえば、各国にはそれぞれ特有のカエルの形が作られていて庭に飾ってある場合が多いが、住んでいるカエルの雰囲気を出そうとするので微妙に違う。この中庭に置いてあるカエルは眉が描かれているところに特徴があるかなと蕪留さんは思う。ずいぶんくっきりと濃い顔だと思う。多肉ちゃんと蕪留さんが住んでいるアパートの近所にある置物のカエルは小さくて、付けまつげをつけて頬紅のように丸く赤い印が左右に付いている。とはいうものの、顔の造作にはあまりこだわりがない。それに比べて、窓から見える中庭のカエルの置物はやはり顔というものにこだわりがあるように感じた。

中庭には小さい水溜まりが配置されている。水溜まりを配置するのはどの国でも同じ志向だと思う。庭の小世界を作るときに、水溜まりはうまい具合に一つの中心を示してくれる。水溜まりの周りに置くものは、民俗的な好みが成り行きで付加されている。たまたま庭の所有者が小さなセルロイドのアヒルを入手して、部屋に置いて飾る場所がないので水溜まりの縁などに置いてしまうことがある。実際にはセルロイドのアヒルは製